

第四章　ねぶた確子の夜

○

1

白岩由吉の人並みはずれた体力は、八甲田山中でマタギの源蔵に見込まれたほどの体の発達にあつたが、その後の彼の青春時代の肉体労働の日々もひとまわりまた彼の体を逞しくした。

八甲田温泉郷の豆腐屋を無断で出て、彼は十八歳の時に、青函連絡船に乗り、青森から函館へとシヨツパイ河津軽海峡を渡つた。大正十三年のことであつた。

やつと北の地にも春の訪れた五月初めの日、彼は生れてはじめて北海道の函館の地を踏んだ。小さな柳行李一つ、現金はわずかしか懐にはなかつた。

魚の生臭い匂いが染みついたような街であつた。だが活気があつた。

一膳めし屋で、めしを食っていると、はつぴを着た男が開いたままの入口から顔を出した。

「おい、仕事があるぞ。仕事はきついが、金にはなる、たったの二名、早いもん勝ちだでな」

と、声を掛けてきた。

一膳めし屋の中年女が、彼に眼で行くなと合図をしたが、由吉は気付かなかつた。

「おらごと連れでいっでけれっ」

めしもそこそこに彼は立上つていた。

「おつ、おめえや、力がありそうだな」

男は店の中に入って来て、彼のめし代を払った。

「おらの分は」

「いいんだよお、まかしておけつて」

黒崎組と書かれた番屋のような小屋がありそこに彼は連れて行かれた。

そこは漁舎といわれる漁夫たちの仮泊所だった。畳のない板床にわらむしろが敷いてある。先着組が三十人程もいた。

一升壇がおかれ、するめを肴に男たちが茶碗酒をふるまわれていた。

「よろしくおねげえします」

近くにいた男たちにあいさつをする。

「な、おめ、津軽のもんだべ」

赤茶けた顔をした三十前の男が言った。

「んだア、生れは三厩（みんなまや）だあ」

「せば、漁師の出か、おめ」

「いえ、そうではねえです」

「はは、どうせ地獄の船にのるだ。どこのなにがしでもいいってことお。戒名でも聞いておぐだが」

まわりの男たちが一斉に笑った。

みんな一杯のんで機嫌のいい顔をしている。ここにたむろしている連中は、みんな、蟹工船にこれから乗り込むのだった。

蟹工船は金にはなるが命と引換えだ。

と、青函連絡船の三等客室で人が話しているのを彼は耳にしていた。

大正三年雲鷹丸（水講練習船がカニ缶詰事業を開始したのが嚆矢（こうし））したが、初めとされ、本格的操業は大正十年の呉羽丸の出漁からと言われている。

サケ・マス漁、練（にしん）漁などで北の漁場はこの頃賑わいを見せていた。

ほんとうなら、鯺漁の漁夫になるために彼は北海道に渡る気だったのだが、不漁年のために決意がつかなかった。

三年に一度は鯺漁は不漁になる。

昨年はその傾向が見え、彼の知っているヤン衆鯺漁の若衆だった一人が、新米は仕事にありつけないと言春鯺漁は早春の二月下旬から三月一杯ぐらいが漁期で、漁場には東北方面や、道南の各地から若い衆が繰り込んできた。

由吉は、結局、春の出稼人の一人になれず、自分から、カニ工船に乗る気で津軽海峡を渡った。

質（たち）のよくない周旋業の男の口車にのせられたが、ひと稼ぎ出来ると思うと、気持が高まった。

だが、カニ工船の漁場を巡っての頃、日本とロシアは相争っていた。

ロシア領海に好漁場があったからである。色々な条件をつけられたり、また実際にトラブルも発生していたので、カニ工船の船団には日本海軍の駆逐艦が同行した。

同時に、サケ・マス漁、カニ漁とも国策

に沿った一大事業だったので、政府の力を借りた企業家が北の領海では権勢を揮っていた。しかも、不況や、農村の不作などが続き、働き場所がなかったから労働者はあふれていた。農家の次男、三男坊などは、勢い、出稼人の道を選ぶしかなかったし、大学卒でも就職先がなくカニ工船に欺されて乗船したりした。

「命がな、あるうぢによ、女子ごと、抱いてくるべや」

出漁の前日、漁舎の差配をしている男につれられて、彼も遊廓に連れられて行った。石鹼やチリ紙、下着類、歯ぶらしに歯磨粉なども用意される。

これらはみんな前借金にされ、余り派手に出漁前にあそぶと、働いても借金だけしか残らなくなる仕組みになっていた。

なにしろ、カニ工船ともなれば雑夫の数だけでも一隻で四百人は越す。

漁舎の者が一連で上ったのだが、それでも六十人はいた。

魚臭い街の外れに、ここだけは立派な妓楼が十数軒はあった。

どの遊廓もカニ工船に乗る男たちに占領されていた。薄暗くされた女郎部屋は屏風（びょうぶ）で三つに仕切られていた。

いわゆる、廻しである。男たちの数をこなすために、一人の女郎が、順繰りに煎餅布団の上で自分の番を待っている男たちに体を借して行く。由吉もその順番を待った一人だった。

「はやぐイっだら損するだでな」

隣りの男はねばるつもりだったのだろうが、女に腰を使われて果てた。

「そしたに、揉んだら、駄目（まい）ねえ……」女も注文をつけたりしている。

次は由吉の番だった。

..

女が屏風の陰から現われた。由吉はまばたきした。色の白い大柄の女だった。赤い長襦袢（ながじゅばん）一枚で、胸元はもう乱れている。懐から桜紙をとり出し、枕元においた。ごそごと布団の中に入って来た。丸顔の女だった。

由吉とは同じ年頃に見えた。

どうしていいかわからずに、彼はじっとしていた。赤い襦袢の裾を広げ、女は素足を絡めてきた。太腿と太腿が触れた。眼ばかりぎよろつかせていたら女が言った。

「初めてげ、あのな、おらの観音さま拜んでおいだら、命、長らえで、おらとまた逢えるだぞ」

「おっ、ええ目してるだなあ」

隣りの屏風から男が顔をのぞかせた。

「助平爺いだア」

女は別に非難しているふうでもない。

暗い裸電球の下だったが、あお向けに寝ている由吉の眼の前で、女は両脚を開いてみせた。由吉は枕から首を半分上げた。真黒の陰毛だけが見えていた。へその下あたりまで剛毛がびっしり生えていた。

女ゴの穴コは熊ン穴。そんな子供の頃に耳にしたことばが思い浮かんだ。

「ほれ、この穴コさ、しつかり入れへや」
女はなにも言わなかったが、津軽弁だった。同じ故郷の誼（よし）みで女は由吉には親切にしてくれたのかも知れなかった。さつきすませた男も津軽弁だったのに、と思った。ふんどしの中に手を入れて、男のものをつまみ出した。

はじめてで緊張していたのか、彼のものはまだ半勃起の状態だった。指で先端部を剥かれた。なんとも気持がよかった。

触れられただけでむくつとげた。

「初めての男は、門出だきや。おらの穴コさ自分で入れてみへえ」

女は煎餅布団の上であお向けになり、大きく脚を開いた。二本の指で下辺の挿入部を開き示してみせた。黒い陰毛の下に、赤い裂け目が見えていた。

「ああ、おらもう一人前だア」

腰を押しつけて行ったら、柔らかな皮膜の間におのれのが分け入っていた。ぐいぐいと腰を動かす。ただわけもなく五度、六度と突いた。いわゆるピストン運動である。急に自分のものが、爆けそうになり、もうそれで終っていた。

「おめえ、名前ばなんてす」

「かね子だア」

行為を終えてさっぱりすると思ったのに、欲望の強さはまだあり、思いが残った。

「おらあ、まだくるはでな」

かね子は何とも言わなかった。

もう次の男の場所に行くために一応の身

繕いをしていた。

「仕様もねえつ」と由吉は思った。

2

カニ工船神鷹丸一三三〇〇ン）が函館港を出港したのは五月の上旬だった。

「とうとう地獄サ行くべえか」

船底の糞壺と言われる薄暗い場所に雑夫と呼ばれた男たちが二百人余り詰め込まれていた。中馬という名の中年男が、はじめから由吉の面倒をよくみてくれた。

にやにや笑ってその様を見ていた男たちがいたが、もちろん、彼はそんなことには気付いていなかった。

いわゆる蚕棚で、はじめはみんな何となく出身県者同士ひとかたまりになった。

中馬は津軽の北、鱒ヶ沢の漁師村の出身だった。中馬は川崎船に乗っていたので、雑夫たちとは給金もちがう。

大河原監督、綿引雑夫長、みんな権力を笠に着て威張り散らしていた。

西カムチャツカの漁場に出た時から、一日の睡眠時間は四時間になった。

由吉は最初は甲板上のカニ揚場に回された。網に掛かったタラバガニを甲板上に揚げ、ワイヤモツコを手鉤（てかぎ）で取外し、カニ外し板の柵（ます）の中に投げ込む。あとは脱甲作業となる。

カニ漁は、川崎船が早朝に投網のために漁場に出ることから始まる。

そのあとを本船が追い、順次、網を揚げて行く。漁獲が多い時は仕事が集まる。

原料蟹溜場では一日中立ったままの作業になるので、相当の体力を必要とした。

オホーツクの海を越えカムチャツカの漁場に着いた頃は冷たい霧雨が降った。

さすがに、頑健な体の由吉も、立ちどおしの作業と、厳冬期のような寒さには参った。吹きつさらしの上甲板には時には十五メートルに近い、斜めに吹きつける風が通りすぎたりした。

由吉は漁場に出てみて、はじめて、カニ工船が地獄船だということをもつて知った。一月（ひとつき）も操業を続けているうちに、怪我人や病人が多く出始めた。

だが、漁業監督や、その手下の雑夫長は、各船団が漁獲高を競っていることで、一切休業を認めなかった。

中馬はうまく立ち回っていた。雑夫らの不満や不穏な動きはすぐに中馬ら、糞壺部屋の自称幹部らがうまくなだめに回った。

カニ漁が多くて、みんなへとへとになっている時など、一升壇の日本酒を何本も手に入れてきたりする。中馬が由吉に対して親切な理由がわったのは、航海に出て一月ほども経った日のことであった。

この神鷹丸にも何人もの知り合いがいるらしく、肩で風を切って歩いていった。半纏（はんでん）に、きりつとした股引（ももひき）き、鷹匠（たかじょう）足袋を履いていた。威勢もいい。頭にはこれまたきり

りと捻り鉢巻をしている。

もう三年、カニ工船に乗っていると中馬は言った。

「ちよつとでも風が吹いでみる。木っ葉船だから、横波受けだら地獄の底だべな。おめえ、でつけえ尻（どんず）だばしでるがら、力仕事には向いでるら。へへ、このどんずば、女子（おなご）に似でるねえんが」

そんな冗談を言い、中馬は由吉の尻を撫でた。出航すると、もうすぐ仕事だった。

カニの漁具は底刺し網で一反の長さは四十七メートルもある揚網は搭載漁艇八く十人で行ない、漁獲物は母船上の上甲板で処理される。缶詰工場を船に持ち込んだのは日本人独特の智恵だった。

近海で採れたタラバガニが乱獲で減り、カムチャツカ半島、そしてアラスカのブリストル湾へとこの頃は船団は東進していた。オホーツク海をつきすすむと、はつきりと海の様子がちがってくる。

海氷が、海に捨てられた石のようにぼっこりぼっこりと浮いており、海氷同士がぶつかって砕けて散ったりした。

日本の北端にはもう春が訪れていたが、ロシヤ領に近づくにつれて、灰色の風景に変って行った。

糞壺ではルンペンストーブが、炊かれ、そのまわりには、顔ききの古参の、川崎船乗組員の男や、漁労作業員が自分の場所のような顔をして石炭箱の上に坐っていた。カニ工船は母船と随伴する二隻から三隻の

独航船で一船団を形成する。

川崎船というのは母船に搭載された漁艇で十トン内外の動力船である。

主に投網作業を行ない、一部は海域の調査活動にも従事した。大体母船一隻で八隻程度を塔載していた。

中馬は、軍隊にいたことがあるので、由吉のことを「おい、当番兵」とも「新兵」とも言った。

風呂に入ると、中馬は彼の背を洗ってくれ、「女子のようでねえの、なんぼでつけた、どんず尻だば」とまた嫌らしいことを言った。くすぐりたいのにしゃぼんの泡を由吉の尻の穴にばかり塗りつけてごしごしとこすった。

やっぱり、湯槽に入ったまま、洗い場の二人をのぞき込むようにしてにやにや笑っている連中がいる。そんなことをされると、由吉は変な気持になった。

「あとでな、おらのとっておぎの、疲れがとれる蜂蜜飴やるでな、な、ええが。待つでろ」

なんのことか、田舎者の由吉にはわからなかったのだが、夜中に由吉は中馬に呼ばれた。中馬に連れられて、上甲板に出た。

木で組まれた櫓（やぐら）に、大きな網が干してあった。真っ暗な海に向けて、時折り、霧笛がぶおーぶおーと鳴った。

折り畳まれた網がある。潮風になぶられて濡れていた。その陰に、由吉は連れ込まれた。

「ええが、おめえもええ思いできるじや。うしろ向いで、おらに尻の穴コ、さおらさせてくれるだけでええ。ほれえ、さつき、風呂ン場でちったあ、ええ思いたべ」

中馬はポケットから石鹼をとり出し、ぺっぺつと唾を吐きかけた。

ズボンを引きおろされていた。由吉は裸の尻をさらした。犬みたいに甲板上で四つん這いにされた。

「ああ、そうだば、餌ぐれてやらねばな」

ポケットを探り、飴玉を取り出すと、一粒を口の中に放り込んでくれた。

甘いものはもう久しく口にしたことはない。歯の間にはさみ、すぐ溶けてなくなるのを防いだ。

なにをされるのか、由吉はわかっていた。味噌蔵や漬物倉の隅で十五、六の少年たちはよく、屈強な男に後からおおいかぶさられていた。

時折り、不作法に、そのそばを通り過ぎたりすると「馬鹿だれ！あっちさ行げ！」と、怒鳴られたりもした。

「へへっ、まんまるこいどんずだば」

中馬は余程、由吉の尻の形が好きらしい。また石鹼をとり出し、ぺつと唾をかける。冷めたい手で、由吉の尻を撫でさすり、風呂場でしたようにしゃぼんを塗りつけた。指まで尻の穴に入ってきた。

ごわごわした指先で痛い。「ぺっぺっぺっ」とまた唾を吐いている。もう、猛り切った先端部を押しつけてきた。

「へへ、生娘（きむすめ）だでな、おめえは」

かんたんに入るものではない。

由吉だつて緊張して尻の穴をぎゅつと絞っていた。

「力拔げえ、こごさ、力入れるんでねえ」

やつと、呼吸が合った。

怒張した熱いものが、由吉の皮膜にまつわりついてきた。

「いでえ、いでえつだら：」

それっ切り由吉は声が出せなかった。

中馬の手が前に回ってきて、彼のものをしごきにかかったので、強い快感がもたらされた。中馬は腰を抱えたまま放出した。やつと皮膜の穴が滑らかになってなお、奇妙な快感が持続した。

初航海時の神鷹丸で、由吉は週に一度は中馬の欲望を受け入れたものだから、男同士の行為がこの時身についていた。

出航間際に上った遊廓のかね子という女の初体験があまりにも呆気なかったせいもあった。

五月から九月の初めまで、カムチャツカの海で操業した。ほとんど天候が秀れず、雪まじりの雨が降ったり、冷めたい霧雨が視野を閉ざしていることが多かった。

時折り、晴れることがあったが、そんな時は能率を上げるために川崎船がフル操業し、揚網作業までやったりしたので、甲板でカニの処理作業をやる連中は立ちづめで十数時間も同じ場所にかじりついていなけ

ればならなかった。

もつとも寒いよりはましだった。

疲労と悪天候、それにめしと味噌汁、漬物などの貧しい食事のために脚気になったり、発熱して肺炎になる者が出た。

この一航海で、十二名が事故と病気で死んだ。朝起きたら隣りの男が死んでいた。海に投げ出された者もいる。彼は地獄船で生き残ったことで自信を持った。腕つぶしも強く、体も頑健にできていた。

子供の頃からの労働で鍛えられていたのだった。

3

二回目の航海にも彼は志願した。

あれだけの地獄船に乗って、病氣一つ、怪我一つしないのは自分が生れつき丈夫な体なのだと思った。若さもあつた。金の魅力ももちろんあつた。

一航海で九十円もの金を懐にした。

なにか天下をとったような気になった。

もつとも、陸に上つても中馬にあちこちと引き回され半年も経たぬうちに無一文になった。遊廓の味も覚えた。中馬は陸へ上ると、もう、彼などは相手にしなかった。

景気の悪い時代だった。秋あじ鮭漁に出て、由吉はどうやらその年を越せる程度のは金は稼ぐことができたが、懐の中は淋しかった。中馬は津軽の鰺ヶ沢に帰っていたが、春になると、またカニ工船に乗るために

、函館の街に戻って来た。同じ、黒崎組という周旋所で二人は落合った。

中馬の話は、あちこちで女にモテた話ばかりだった。

「おらも二十五だでな。青森で嫁つご見つけてきた。今度の地獄行きで最後にするんだア」

彼らの乗った神鷹丸は去年も、出船した船の中では上位二位に入る収獲量を誇っていた。ロシヤ領への越境、苛酷な労働条件、人を人と思わぬ監督などのやり方が、それだけの漁獲高を確保できたのだった。

「あの、大河原の奴、何人もぶち殺したお陰で会社から金時計もらったんだど。今度は、金の延べ棒もらうつうて張り切ってるべさ」

「それだば二、三十名は地獄行きだべ」
漁夫たちの出航前の会話である。

神鷹丸は三月半ばに函館港を出港した。糞壺に入ると、はじめの二、三日は、初乗りの者がいるから船酔いし、船底には吐瀉物の川ができた。

酒をのんでいるものもいるから、その匂いだけでも胸が悪くなる。初めて乗った時は、彼も吐いた口だから気にならなかったが、二年目ともなると、余裕ができたせい「凄えことだべ」と思うようになった。

中馬は、もう、今年には彼には眼もくれなかつた。やはり津軽出身の、今度は脾弱そうな十五、六の少年に目をかけていた。

なぜだか、神鷹丸は今隼は水上署の巡查

を二人、はじめから乗船させていた。

大河原監督は、はじめにみんなの前で大演説をした。

「ロースケはみんな怠け者、そんな奴に日本男子たるものが負けてたまるか。この船に乗ったからには、この大河原におめえら命を預ける。カニ一匹がわが大日本帝国の財政を支える。お前らにはこういう難しい話はわからんだろ。要するにだ。カニがどんどん売れると大日本帝国は大金持ちになる。わかったか。生きて帰れば、お前ら食いつめ者のルンペンでも大枚百円は懐に入る。なっ、命と引換えにする。当り前の話だろがっ」

カムチャツカ行き船ははじめから、禁漁区のロシア海域を目指していた。

他の船団がもたもたしている間に予定より早くロシア海域に到達し、敵の裏をかい、さつと引き揚げる作戦だった。

それで、日本海軍の駆逐艦の護衛はなかった。海軍が随行しては国際問題に発展する可能性大だったからだ。

オホーツク近海ではすでに乱獲が祟りそれほどの数量は期待できなくなっていたのだ。東カムチャツカの海域に出た時は、あいにくの時化（しけ）模様だった。

すでに禁漁区に入っていた。

大河原監督は、

「これこそ神の助けだ。この荒れ様ではまさか操業するとは思うまいぞ。それにな、毎年より二週間は早くここへ来た。ロース

ケは安心しておるに決まっている。いいか、ここへ来るまでにお前らにはただめし食わせて、たっぷり眠らせてやった。そのぶん、気張って働け！」と激を飛ばした。

実際は網の手入れや、運尾込まれた用具の運搬、整理などでたっぷり働かされていたが、彼らには漁獲がない以上、みんなむだ働きになる計算だった。

睡眠時間が失くなった。

網を降ろすために先行する川崎船も二度が限界だった。三度、四度となった。

この時、二年目であったことと、中馬が川崎船に乗っていたことから、彼も金になる川崎船に乗った。

十トン程度の船だから、まともに波をかぶりし、横揺れも激しい。

足を踏ん張っていないと海中にさらわれる。一度、海に落ちたら余程のことがないと助からない。身を刺す氷の海であった。

ゴム製の合羽に身を固めての網おろしの作業だが、体の芯まで冷えて来る。唇だつて、寒さのために歯の根が合わない。

ゴム手袋の手も痺れる。

由吉が川崎船に乗って三日目のことであった。この日は、朝から雲行きが怪しかった。投網の漁場に着き、作業を開始した頃、風が出てきた。海が灰色になり、横なぐりに雪まじりの雨が降り始めた。

川崎船が自船の印をつけた刺し網を投下すると何時間かあとにその漁場に母船がやってくるようになっていた。川崎船はこの

とき、母船とは遠く離れた位置にいた。

「大時化だべ。こりや、木っ葉になったらおしめえだア、お陀仏だべ」

船頭が叫んだ。

カムチャツカの海は、不法者をのみ込もうと荒れ始めていた。急ぎ、川崎船は母船に帰るべく、投網作業を中止した。

「ここで死んだら、おら一生嫁コなしだべ。どうしても生きて帰らねば」

船ばたにしがみつき、中馬は由吉に声で呼び掛けてきた。帰船するまでの一時間余の時間が、由吉にはとてつもなく長い時間に思われた。

「波にさらわれるでねえぞ」

船頭の声も風の音に消された。

全員がスピンの柱に、互いのロープを結び合い、体を固定した。川崎船は救命艇の役目を果すべく造られていたから、ある程度まで安全性は保証されていたが、広い海の上では木の葉にも等しかった。

だが母船を見つけた時、彼らの乗った船は帰船を拒否された。天気予報では一時的なもので作業を完了してから帰れというものであった。接舷を認められない以上、船に戻ることは無理だった。

他の川崎船も追い払われた。

それから一時間後、船頭の男が予言したとおり海は大荒れに荒れた。

「このままロシヤ領に逃げ込むしか助かる方法はなかんべ」

船頭が悲痛な声をあげた。

だが陸地が見えるわけでもない。

川崎船は嵐の中を、母船に戻るしかなかった。今度はもう全員死ぬ覚悟だった。

「ええか、死ぬ時や一人一人だぞ」

マニラロープで一人一人が舷側の支柱に体を縛り付けた。もう一蓮托生（いちれんたくしょう）はごめんだというわけだった。やっと母船を見つけた。

だが、波が高く接舷できる状態ではなかった。やっと、母船からおろされたウインチのワイヤーで吊り上げられたが、はずみで左舷にいた三人の男が母船の舷側の鉄の壁にぶつけられた。

そのうちの一人に中馬がいた。

宙ぶらりんになり、揺れに揺れた。

甲板上に放り出されるような恰好で川崎船はどしんと母船上に戻された。

だが、横倒しになった川崎船は三人の死人を同時に投げ出していた。

中馬の頭は割られ、甲板上が朱に染まった。この時、奇跡的に白岩由吉は助かった。だが腰骨を打っていて立上れなかった。二人の水上署の巡査がこの場は立会っていた。別に何も言わなかった。

二人共私服であった。

ロシヤ側に知れては困るので二人共作業衣に身を固めていた。

「こしたことになるなあ、はじめっがらわがっていたことだねえが」

白岩由吉は、巡査が眼の前にいるということ計算した上で、大河原監督に噛みつ

いた。これは殺人行為だと思った。

中馬のぼっくり割れた頭からは脳みそが剥み出していた。

この船を降りたらおらあ三国一の花婿だ、そのことばが頭にこびりついて離れない。それで余計に彼は激高していた。

だが、巡査の一人は言った。

「これは不可抗力だ。運が悪かっただけのことだ」

「なにお！人間があ、三人も死んだんでねえが」

それだけ言うのが精一杯だった。

綿引雑役長や、その手下の連中が、六尺棒で打ちかかり、由吉は後頭部を打たれて昏倒した。ほんとうの地獄船の実態をその後も知らされた。

二時間の睡眠時間しか与えられないので、作業台の上にくつ伏せになって絶命した者もいた。朝起きたら目覚めることなく、そのまま冷たくなっていた者もいた。

中馬に可愛がられたまだあどけない顔の少年も朝になったら死んでいた。

実際にカニ工船では労働条件の悪さに、船上で雑夫を中心に暴動事件が発生した。

函館毎日新聞は大正十五年九月八日付の新聞で、カニ工船博愛丸事件として地獄船の実態を暴いた。

昭和十六年にもカムチャツカ東タムラツト十五漁場で十八歳の少年が、足に負傷して番屋で休養中、漁撈長（ぎよろうちょう）が頭部その他を乱打、半死半生の目に遇

わせ、ためにこの少年は精神異常を来したとして、函館地裁民事部に訴訟が出された。また傷が重いため、カニ工船に同乗していた医師に診断を求めたが拒否されたとある。

白岩由吉がカニ工船に乗っていた時代から十五、六年が経過したのちのことでもこの状態だから、白岩由吉が経験した地獄船はもつと悲惨を極めた。

白岩由吉は、一つの時代の暗黒部を、おのれ自身の眼でつぶさに見てきた一人であった。

それでも、彼はこの年の秋もカニ工船に乗っている。すべて金のためであった。

命を的にしなければ若者の手にはまともな金が入らなかった。

が、この年、ほんとうに彼の乗った小さなカニ工船は東カムチャツカの海に藻屑と成って消えるところだった。

朝、目覚めたら大氷塊が眼の前にあった。流水の一つだったが、秋のカニ漁だったので衝突されたらもちろんのこと、流水群のただ中に取り込まれたら船は運航不能になり、大氷海におき去りにされたまま全員が飢えと寒さで死ぬところだった。

とうとう三年目はカニ工船には乗らなかった。命を代償に稼いだ金は、がっちり貯め込んだ。陸に上つての事を彼は真剣にこの時期、考えていたのであった。

白岩由吉にも幸せな時代はあった。

血の汗を流して稼いだ金を元手に、青森市内で彼は小さな魚屋の店をもった。

この時、岩木山の麓の村の農家の娘を嫁にもらった。ふじ子といった。

彼が二十二歳、ふじ子が十九歳の時だった。町家に魚の行商に行くといった体の小規模の店であった。それなりに顔馴染みの客もいたが、あてにしていた安方町や新町あたりの旅館の注文が北海道の鯺漁の年々の不漁で客がへり、やがて、商売がうまく立ちいかなくなった。

不景気風に貯め込んだ金も、ほとんど使い果してしまった。

それでも、彼は二年は頑張った。豆腐屋の辛い仕事や、地獄船での経験にくらべれば、さして苦にはならなかった。

ふじ子は無口だったが気のやさしい女だった。八人家族のまん中で、まだ下には小さい弟妹たちがいた。貧しい家庭の出である。考えてみれば、はじめて遊廓に上った時の、かね子という女とよく似た体型の女を嫁にもらっていた。

色白で、少し小太り、大柄に見えた。

初夜は新しく借りた魚屋の二階の一室ですませたのだが、「いでえ……」というふじ子の声を聞いた時、カニ工船の甲板上で中馬に後から体をかぶせられた時の、あの自分の経験した痛さの感覚のことを由吉は考えたりした。

ふじ子も毛深い女で、女のものはこのようなものかと由吉は思った。

出血して敷布が汚れた時、一人の女を自分のものにしたという感慨を持った。

同時に、ふじ子のために頑張らねばと心に誓ったものだった。

姉の真佐江は秋田の農家に嫁いでいた。

直接会うことはできなかつたが、お祝いに綿さらしの反物をもらった。

腹帯にもなることから、早く赤ちゃんをね、という姉の気持がこもっているように由吉には思えた。

が、相変らずの貧乏暮らしが続くようになった。魚を扱う者は威勢がいいから、博変（ばくち）好きが多い。

由吉もカニ工船で花札賭博を覚えた口だから、ついつい賭場に顔を出すことになった。少しの貯えはあつたのに、賭場に入入りするようになってまたたく間に金は消えた。仕入れの金に困るようでは、魚屋稼業などやっけていられなかった。

新婚の二人は、青森では暮らしにくくなり、津軽海峡を渡った。小樽に住みつくようになつた。一年ばかりが経つた頃、ふじ子は彼の子供を身寵っていた。

小樽に出たのは年々漁獲量が減つてるとはいえ鯨漁がまだ盛んであつたからだ。

なにかの仕事にありつけると思つて若夫婦は見知らぬ土地に来た。

鯨漁は早春から六月の末頃まで続く。産卵のために沖合いから浜に入つて来るとこ

ろを一網打尽にするのだった。

半纏（はんでん）に、ねじり鉢巻き、ヤン衆は威勢がいい。平雇夫になり、一漁期で三十五円ほど稼いで一息ついた。

白米一俵（六十キロ）が、四、五円した時代のことでる。

ふじ子も身重なのにモッコを使った沖揚作業に精出した。

ある日、理由も知らないままに、ふじ子は仕事を断わられた。

まだ妊娠三カ月だったが、かなりつわりが強く、身重であることがまわりに知れた。よくわからなかったが、結局、由吉も平雇夫の仕事につけなくなった。

鯨場の風習として、お産と火葬が特に嫌われた。たとえば、親方などの家族で臨月間近い産人（さんと）がいたりすると、鯨の漁期なら部屋を仕切って隔離したり、別の家屋や里に帰したりした。

お産見舞いをして、漁場にあいさつに顔出ししたりすると、目の色を変えて怒鳴りつけられ、塩をまかれた。

出産の「出る」が忌みことばで、せっかく湾内に入って来た鯨の大群がまた出てしまったては親方連は大損をするから産婦を嫌ったのであった。

もつと悪いことに、ふじ子のはじめの無理も崇ったのか、体調を崩した。

つわりがひどかったが、一度連れて行った産婆も心配することはないと言ったので、由吉もそのままにしておいた。

だが出血症状があったり、痙攣症が出た
りで、急ぎ産婆に見せたら今度は妊娠中毒
症の疑いが充分だといわれ、ふじ子は入院
させられる身となった。もう六カ月を過ぎ
た晚期妊娠中毒症で医者に命も危ないと言
われた。ふじ子の顔や手足もむくんだ。

カニ工船の中で見た脚気で死んでいった
男たちの症状とよく似ていた。

医者が診た時は、妊娠腎にまですすんで
おり、結局ふじ子は、食物も受けつけなく
なつて五月のはじめに死んだ。

ふじ子の命が奪われた上に、土地の者か
らは、葬いにまで注文がついた。

仕込み親方に、火葬はならぬと言われた
。この地の習慣では、鯨漁が終るまで臨時
に土葬にしておき、ヤン衆が引き揚げてか
ら改めて火葬にするのだった。

遺体を火葬にした際の煙が、海に流れる
のを嫌つたものだった。

鯨漁は一種のギャンブルに似ていて、い
わゆる網元は大金を賭けて鯨の群来を待つ
。天候や、場所などにも影響されることか
ら、大金を賭けて大損する者もいた。大損
することを俗にかまどがえしとも言つた。

世話人がいて、土葬をするための墓地は
見つけてくれた。

だがその差配だつて余計なことだった。

見知らぬ土地に来てふじ子を死なせ、拳
句の果てに、あれこれと、葬いにまで注文
をつけられて、由吉はすっかりこの地が嫌
になった。

山の中腹の墓地に穴掘り人夫と共に縦長の墓穴を掘った。立会人は彼一人だけの淋しい葬ら이었다。

せつかく掴んだ幸せだったのに、家族運が薄いのか、白岩由吉は妻のふじ子まで失なつた。傷心の余り、鯨漁に賑わい立つ小樽の街を一人飛び出した。

どこと言つて行く宛てもないままにー。

5

昭和五年、この年は鯨漁が大打撃を蒙つた。最盛期五万トンは水揚げした漁獲高が、実にわずか九・七トン、大不況の嵐が、春が来たというのに北海道の地には吹き荒れていた。

この時期、白岩由吉は悪事を覚えた。稼いだら稼いだだけ使う、また、博突にも手を出した。金がなくなると、どこかの土蔵に入って物品を掠めとってくる術も覚えた。仲間の一人に見張り役を頼まれ付き合つたのがはじめだった。

その頃、彼は室蘭にいた。

仲間の男に、彼は、錠前の開け方のコツを習つた。自分では無骨い手をしていたと思つたが、案外と器用なので、錠前を開けるのに自信をもつた。

ある夜のことだった。

小金を懐に酒を飲んだ。文無し of 男と意気投合し、したたか酔つた。

二人で肩を抱き合い、深夜の街を歩い

ていたら、人力車を引く、モウロウ車夫に呼び止められた。

「あんたら、仕事があるんただが、世話してやろうか」

白岩由吉はその時、小樽以外ならどこさでも行くぞ」と答えていた。

深夜に流して歩くのをモウロウ車夫と言った。不景気風が吹いているのに人力車に乗る客がそういるわけがない。

彼らは酔っ払いや、浮浪者同然の男たちを見つけては土工仕事の周旋屋に売り飛ばす先鋒役を務めていた。

酔っ払っていたので、どこかの周旋屋の二階で二人その夜は寝てしまった。

朝になるとめしが出て、加山という名の男と一緒に馳走になった。

ここがどこであるかぐらい、酔いの醒めた白岩には判っていた。

土工人夫の周旋屋、これから送られて行く先はタコ部屋だった。

が、彼は度胸を決めた。

あの、カニ工船でも耐えられた体だ。少々のことで音をあげるものかと思つた。

だが、徴兵検査でも体が小さいことで、乙種になったぐらいだから、はじめは組長は嫌な顔をした。

鉄道工事、開拓道路人夫、炭坑夫と言つた仕事は、力仕事だから大柄でがっしりしている者のほうがいいのだった。

だが、太い腿と張つた肉を見て「まあ、

いいだろう」と組長は言った。

全部で男たちが十七、八人もいた。

彼がもぐり込んだタコ部屋は半ダコ部屋と呼ばれ、警察に届けていない質の悪い組だった。警察に雇人の名前、年齢、出身地をきちんと届けるのが決まりだったが、彼がもぐり込んだ江村組は各人の連絡先を訊いただけだった。

死んだ時に連絡するためのものである。

堂々と移動しては警察に知れるので、名も知らない小さな駅から汽車に乗せられた。着いたところは札幌郊外の川底掘下げ現場だった。

札幌駅に着いた時は全員駆足で交番裏を走らされた。石狩街道を北にと道をとった。粗末な木小屋が三棟並んでいて、そこが彼らの宿泊所だった。

着くなり、何人かが一発噛まされた。

動きがのろいというのであった。

組長と幹部連中の、鷹揚（おうよう）な態度が急に変わった。

周旋屋の組長は先ずみんなを板の間に正座させた。もう夕刻で、あたりは暗くなりかけていた。

受け入れ側の親方がやがて工事現場から顔を見せた。若い幹部が一人ついてきた。六尺棒を一本携えている。

その石倉という男の二の腕には入墨が彫られていた。

「一つ、時計、刃物、発火物、貴重品、金

はこつちで預る。要る時は帳場に申し出る。二つ、国家に法あり、また一家には家風というものがある。この部屋のしきたりどおりにやるから、それに従え！わかつたか！

腹の底から声が出たのでみんな体を固くして聞いた。

いつの間にか、白岩由吉は、みんなが怖れたタコ部屋を風来坊のように渡り歩いて暮らすようになった。

行先我が家で女郎が妻。

土工たちの、その日暮らしの気易さが彼の身にもついた。

強い腕っ節に、ぱんぱんに張った固い腿、それに強い足腰、天から授った強靱な肉体のお陰で、彼は野垂れ死にせずにすんだ。だが、死と背中合わせであることをある時、教えられた。

原木の積取りに小樽から船に乗せられ、遠く樺太（からふと）まで連れて行かれた時のことだった。

船倉（だんぶる）の中で仕事をしていた時、昼食を知らせるドラが鳴った。

われ先にと土工たちはタラップを駆け上った。その時、一人の男が足をすべらせて船底に落ちた。打ちどころが悪く死んでしまった。

原木が時化のために崩れて死人が六人も出たこともある。中士幌（なかしほろ）原野では山を切り崩す作業に雇われた。

零下十五度、三月に入っていたが、春の

訪れの気配など、どこにもなかった。

内地から来た者は大抵、この寒さにやられた。指先がじーんときて痺れ出す。

やがて感覚がなくなって凍傷になる。

それで、指が崩れ、腐って指先がぼろりと取れた連中が何人もいた。ひび割れた手に機械油を塗り痛みを和らげながら作業するのだが、それでも、寒さがはじめての連中はよくこの凍傷にやられた。

あまりに仕事がついので、飛びっちょする連中もいた。

うまく逃げ了せた考もいるにはいたが、大抵は銃口を、背に向けられ、白い雪野を血で染めて死ぬか、ただ白いだけの雪野に自分の足跡だけを残した。

翌朝は暗いうちに叩き起された。

時計は預りになっているのだからだれも時間などわからない。

手頃な丸太が一本横にわたしてあって、その上に頭をのせて、昨夜は寝た。木の枕だった。白岩はよく寝つかれず、まだ寝呆け眼のうちに起され、立ったままの慌だしい朝食ののち、工事現場に連れて行かれた。他の木小屋からも人足が入ったので四十数人はいた。

二人の幹部が馬に乗り見張った。

馬の鞍（くら）には銃がついている。

あと二人の見張りも銃と六尺棒を持って見張っていた。川を掘る作業で、この川の中に入ってやる仕事をアヒルと言った。

十月はじめの季節、水が冷たいのでぶる

ぶると体がふるえた。

小便をするのにも許可がいり、昼めしも立ったまま十五分ほどで済まさねばならなかった。

結局、十二時間ほども水の中に入ったきり、休みなしだから、かなりの重労働だった。が、新参考は大抵、音を上げたのに、彼は割当てられたコマワリ分を人より早く上げた。寒さにも、あのカムチャツカの冷気で鍛えられたせい、平気で立ち向つていった。

現場から帰ると、野天風呂が焚かれていた。カニ工船の時にくらべれば、陸の上だけにいつ船が沈むかという恐怖感もなく、夜などもぐっすり眠れるようになった。

だが、半ダコ部屋だけのことはあった。動きののろい者や、怪我や病いを訴えた者などでもノルマをこなさない者は犬畜生扱いされた。

はじめての土工仕事は三カ月工期だったので十二月末には仕事が終わった。

小金が入った。

一人で迎えた正月を彼は気楽にすごした。肉体労働にさらに自信が湧いた。

そのまま凍死するかのどちらかだった。特に、中士幌原野の山の切り崩し工事の時は逃走者がよく出た。彼が経験した中でも、特にきつい仕事だった。二人一組でトロッコ積込み作業をした。百五十メートルほど先の捨場に土砂を捨てに行く。元々、小柄なだけに、彼の身のこなし方は敏捷（

びんしよう)だった。

急カーブを乗り切る時は曲芸師になった気分になる。ブレーキを踏みながら体を傾けるのだ。体でうまくカーブを切る技術が必要なのだった。

スリルがあつて彼などは結構楽しんだ。

宮越という松前から来た男と彼は組んだ。この男も鯨漁の漁師を元はやつていたのだが、不漁続きで、結局、周旋屋に騙されてこの地に来た。

まだ若く、欲望だけが強くて女が欲しくなつていた時に、周旋屋に声を掛けられた。「飛びつちよすればええのよ」土工の一人にその前にタコ部屋渡世のいいかげんさを教えられていた。

ヒコーキといつて、周旋屋から土木事業主に売られたあと、すぐ逃げて舞いもどり、同じ周旋屋にまた体売る、逃げ専門のプロのような男がいた。

飛びつちよのプロだった。

実は、白岩は、宮越と図り、一緒に、逃げる相談をしていた。

この時の現場監督の態度が気に入らなかつた。使い者にならなくなつた凍傷の男が、自分の窮状を訴えたことから、かつとなり、酒を飲んでいた勢いで、木刀で男の脳天を一撃した。

男はほとんど即死の状態だった。

雪を掻いて、土を掘り、男の死体を埋めた。中年男で、胸を探ったら、小学校の低学年の二人の子供の写真と妻の写真が出て

きた。

「あいつを殺すか、逃げるか、どっちにすべえ」二人で相談したが、殺すには二人では到底無理だった。この土工部屋でも逃走防止に三挺の銃が置いてあった。

よからぬ企みを考えたためか、トロツコにひよいととび乗り、いつものように急力―ブの場所に掛かった時だった。

ブレーキをかける役は宮越だったのだが、なぜか宮越は忘れた。

それで、猛スピードで坂を下っていたトロツコは脱線し、宙に飛んだ。彼は跳ねとばされ、盛り土の中に顔をつっ込んだ。

左側に乗っていたから助かった。
かすり傷一つ負っていなかった。

が、宮越は、跳ねとばされたと同時に、重いトロツコに乗りかかられていた。

トロツコの鉄箱の角が、顔面をこすり、彼が起き上って反対側にとんだら、宮越の顔は半分失くなっていった。

なにやら、白い蠟面（ろうめん）の顔を見たと思ったら、とたんに、血が飛び、削（そ）がれた顔の半面を染めた。

あまりに呆気なく死んでいた。

この夜、彼は、本ヤキを入れられた。工期も終りに近づいていたので一人ぐらい殺してもどうということはないと監督は考えたのであった。

ブレーキを掛けなかったのが事故の原因だったが、一緒に乗っていたお前がブレーキを掛けなかったのではないかと言われた

。監督は酷たらしい宮越の死に顔を見たことで、寢覚めの悪い思いをしていたのだ。

見当ちがいのことだったが、彼に罪を押しつけて憂さ晴らしをするために、本ヤキを若い幹部に入れさせたのだった。

土工小屋裏の丘の上に連れていかれた。オンコの樹の根元に縛り付けられ、焼け火箸を背に押しつけられた。六尺棒で散々打擲（ちようちやく）された上に、薪で、どこと言わず減多打ちにされた。

ここの飯場で死んだのは、宮越で四人目だった。

彼は五人目の対象者にされた。

「これであしたの朝が来て、死んでいなきやあ、おめえは北海道で一番のタコになれるぞ、この寒さだ」

現場監督が捨台詞を残した。

凍えて死ぬところだったが、この時、彼は生き残った。寒さにはオホーツクの海以来慣らされてきた体だった。大体が、零下十度ぐらいでも上半身丸裸で土掘りの仕事をしたこともあった。

あまり寒くなると逆に体が火照（ほて）って来た。手袋をしていても凍傷になる者がいるのに、彼は一度だって手袋をしたことがなかった。

世話役をやっていた東津軽出の吉峯勇蔵が親方に言われて見回りに来た。

吉峯は帳場を預っている幹部の一人だったが、この時、ブリキ板を二つに折り、折り目に釘穴を開けた特製の鋸（のこぎ

り)で彼の縄を切ってくれた。

幸いなことには、工事現場にみんな出ていた。吉峯が彼に智恵を授けた。

彼は吉峯を荒縄で逆に縛り上げた。

そういう筋立てになった。

ついでに犬皮の胴着や、何日分かの食糧を奪い、逃走した。逃げるという行為に命を賭けたのはこの時が最初だった。

大抵は雪の原野に出て凍死するのに、脚力にものを言わせて逃げのびた。

中士幌の駅まで二日間歩き詰めで逃げ、貨車にもぐり込んで帯広まで体を運んだ。この時、錠前を開けるコツを覚えたことが大いに役立つた。

7

いつの間にか、白岩由吉はヒコーキ専門の札つきの逃亡常習者になっていた。

就業地、本籍、戸主名、生年月日、特徴などと一緒に写真付きの逃走者捜査手配書が、駅頭や、電信柱に張られた。

白岩由吉も、手配書にのせられた一人だった。ヒコーキをやる奴はみんな命を賭けていた。

広い北海道のことで、滅多に同じ組の幹部連中に会うことはなかったが、出喰わしたら半殺しになるのは眼に見えていた。それに、逃げる時だって、運、不運がある。生きることよりも、死ぬほうが

、こんな場合はかんたんなのだった。
ヒコーキなどという洒落（しゃれ）た
呼名の逃走常習者がいたのは、口入れを
する周旋屋に悪質なのがいたからである
。いわば土工人夫は商品であった。

大不況の波が日本全国に寄せていた。
それで公共投資による景気上げと、失業
者を救うために北海道では二十年間に、
当時の金で十七億五千万円を投じ、第
二期拓殖計画がスタートしたばかりであ
った。

苛酷な仕事と、地獄部屋であることさ
え厭（いと）わなければ仕事はあった。

周旋屋にすれば土工人夫は商品だから
、あちこちに売ればそれだけ儲る勘定だ
った。それで、一番早く、逃げてきた者
には、商品に金側の腕時計が出たりした
。若かったから、白岩由吉はゲームのよ
うな飛びつちよのあそびに一時期夢中
になった。

特に名を知られた地獄部屋に売られる
時は、こころが勇み立った。

相手にする連中は、人間の皮をかぶつ
た鬼だった。鬼政だとか、十勝の熊五郎
とか呼ばれて、いい気になっている土工
人夫殺しの男たちが数多くいた。

はじめは、根が真面目な彼は、キソク
人の掟（おきて）をちゃんと守った。

契約書通りに、事業主の組のために定
められた期間をきちんとつとめあげるの
がキソク人である。

キノク部屋は信用部屋と言って、半ダコ部屋のようなひどい扱いは比較的少なかったが、工期が遅れそうになると、どこの部屋だつて人間に鞭をくれた。

すべてこれも国のためだった。

ロシヤが北海道に攻め入ってきたら弾を運ぶ鉄道もないし、道路も整っていない。タコ部屋で働くのもお国の先兵役、カニ工船の時と同じ理屈が罷（まか）りとおつた。

初夏のある日、十勝の作業所にいた時に、仲間と一緒に飛びつちよした。

松林の伐採作業で、信用部屋だったのが待遇はよかつたのだが、就業してニカ月、女恋しさもあつて、林を駆け抜け、追手を払うために十勝川に飛び込み、対岸まで泳ぎ渡つた。

同じ周旋屋に顔を出し、次の組に売られた。この時は、現場に着く前に乗せられた列車から飛び降りて、一番になり、生れてはじめて金皮の時計を周旋屋のおかみさんからもらった。

一日の間に三度、タコ部屋に売られたこともある。土工人夫をしていた時、一人だけ、好きになつた女がいた。

帯広の登沢町の女郎屋の女で、おきぬと言つた。五カ月のつとめを了えて、由吉は帯広の街に出た。町の銭湯に行つて髭を当り、小ざつぱりした衣服に着更えたら男前も上つた。

白岩由吉はこの時、大正楼という女郎屋

に上った。土工人夫にとつては、遊廓はもう我が家のようなものだった。

そのへんは女郎屋のおかみも心得ている。稼ぎの金を持って来て、何ヵ月分のお遊びを派手にやろうというのだから、下にもおかないもてなしぶりだった。

おきぬは秋田の生れで、眼のぱっちりしたおぼこい娘だった。

齡は十七歳、冷害による稲の不作で、女郎屋に売られてきたのだった。

ちよつと気の弱そうなおどおどしたところが彼には氣に入った。

もつとも女の方は、土工人夫と聞いて少し怖氣（おじけ）づいていたのだった。

由吉は酒の酌などをさせながら久し振りのお大尽ぶりにいい氣持になった。だが、由吉は酒の勢いもあったが、この大正楼でいざこざを起した。おきぬが、彼のことをタコと言ったからだった。

他に馴染みの客が来て、いとき、おきぬが階下に立った。「タコが今夜は来ているからね」と、甘えたふうの聲を出しておきぬが客に断わりをいれた。

その声が由吉の耳に入った。それで、とつぜんには彼は荒れ狂った。

もどつて来たおきぬの胸倉を掴んだ。

「おい、タコだどオ。馬鹿にするでね、おらの仕事、土工だど。この野郎、番頭ごっこさ呼べ」

女の首を締め、横っ面を張り倒した。

女は後ろに引っくり返った。

慌てて部屋から逃げ、階下に逃げるはずみに階段で足を踏み外し、大きな音を立てて転り落ちた。仲間もいたが、手のつけられない由吉の荒れ様に部屋から顔を出して見ているだけだった。番頭が来て平謝りに謝った。職業に貴賤はないというのが彼の言い分だった。おきぬを謝らせるために部屋に連れてきた。

指をつき、泪声でおきぬは詫びた。

「田舎者でなにも知らず、失礼なことを言いました。どうかお許し下さい」

よく話を聞いたら、秋田から来てまだ三カ月、みんなが土工人夫とは言わず、タコ、タコと言うものだから、「鳶職のトビ」と同じような言い方なのだと、彼女は考えていたことがわかった。

最後は笑い話になった。

「へへ、トビにタコかア」

それで、彼はおきぬという女に今度は自分のほうから謝まった。仲直りの酒をのみなおす内に、おきぬを抱くことを忘れ、酔い潰れて眠ってしまった。

夜中にふと眼を醒ましたら、おきぬは枕元に座ったまま、寝ずに待っていた。

その心情に、由吉は感激した。

これまでのどんな女よりも激しくおきぬを抱いた。何人もの男に抱かれた女だったが、こんな女を女房にしたいと心から思った。おきぬも彼の気持がわかったとみえ、何度も体で歓びのうねりを見せてくれた。

「おらア、おめごと絶対に迎えにくるはんでな。なあーに、身請けの金（じえんこ）ぐれえ稼ぐぐらいの根性はあるべえ」

ほんとうにその気になり、二日泊った末に翌々日には、もう次の周旋屋に行き、旭川の、給金の高い石切り場に出た。

石切り場の仕事はきつかった。

よほどの腕力と腰の強さがなければ石は一寸たりとも動かない。

さすがの彼もここの仕事にはてこずった。二日目、彼は手に痺れが来た。

とつぜんのこと、両腕が動かなくなつた。六尺棒で肩先を殴り付けられたが、それでも感覚がない。まるで痛さを感じなかつた。次には蹴り上げられ、横払いに六尺棒がとんできた。避けようもない。

うずくまつたまま、二度三度と肩先を打たれた。やっと現場監督の男は事態の重大さに気付いた。

以前にヤキを入れられた時の古傷が、腕の血行障害をもたらしたのだった。

結局、就業二日で、彼は病院に連れて行かれた。顔見知りだった世話役が便宜を図ってくれたのである。

が、病院生活は半月にもなり、しばらくは力仕事を止めるように医者から言われたことで、彼は土工人夫から足を洗うことになった。考えてみれば、カニ工船の雑夫に土工人夫、苛酷に肉体を使ってきた。

どこかに痛みが出ないほうがおかしかった。それでもおきぬとの約束もあるし、女

恋しさもあつて、使えぬ体なのにまた周旋屋に行き、前金をもらつてヒコーキを何回かやつた。

おきぬの体を抱きたい一心だつた。いつも、逃げるのは命がけだつた。

が、ある組にとつつかまり、徹底的に彼はヤキを入れられた。土工人夫としての白岩由吉は札付きになり、追う者もあつたりして、北海道にいられなくなった。

青函連絡船の乗船場には、逃げ出した土工人夫や炭坑夫などを捕まえるために、常時、男たちが何人も張っていた。

彼は銅線などの入っている倉庫に忍び込み、半値で工事店に売った。相手も盗品とわかつていたが買った。

その金で、麻地の背広を買い、山高帽をかぶり、赤いネクタイをした。

モダンボーイのような恰好で船に乗った。逃げる奴はみんな文無し、まさか、西洋かぶれの「一張羅」を着込んで逃げるとは誰れも考えてはいなかつた。

青森に逃げもどつた。小樽の山中に埋めた妻のふじ子の遺体はそのままになつた。おきぬとも別れ別れになつた。